



読書界2月号

テーマ「外国の本」

『不思議の国のアリス』 ルイス・キャロル 新潮文庫

童話としてもよく知られているアリスだが、大まかな内容しか知らないという人も多いのではないだろうか。そんな人にぜひ読んでほしい。アリスの周りに次々現れる不思議で個性的なキャラクター達、魔法みたいな小道具、異世界感溢れる風景…。この作品の様々な魅力が、柔らかく優しく時に激しい文章と、リトグラフが用いられた繊細な挿絵によって存分に味わえる一冊だ。

1年

『チーズはどこへ消えた?』 スペンサー・ジョンソン 抹桑社

この本の物語は、ネズミのスニッフとスカリー、小人のヘムとホーが迷路の中でチーズを追い求めるという内容です。この二匹と二人は、私たちの中の単純さと複雑さを表していて、私たちが、なにかしらの変化に直面したときに抱く感情そのものといってもいいかもしれません。もしあなたが今、なにかの変化に苦しんでいるなら、この本を手にとって見てください。かなり短い話なので、時間のない人にお勧めの一冊です。

1年

『ペール・ギュント』 ヘンリック・イプセン 論創社

イプセンが、演劇として上演することを考えずに書いたとされる『ペール・ギュント』。戯曲でありながら、現実では起こりえない奇想天外な物語になっている。舞台は、ノルウェーを中心に世界中。登場人物は、ペール・ギュントを中心に数え切れないほど。ト書きは少なく、大部分が読者の想像に任されている。舞台を思い描きながら読むもよし、コメディ小説として読むもよし。独特な世界観と特徴的な台詞回しに、きっと引き込まれるだろう。

2年

『猿の惑星』 ピエール・ブール 東京創元社

人類は恒星間飛行を成功させた。ユリッス・メルーはアンテル教授達とともに宇宙飛行に旅立ち、とある惑星に着陸した。そこで彼らが目にしたのは人間のように動いたり喋ったりする猿たちと、野生動物のように振る舞う人間たちだった。猿たちはその惑星で地球と同じような文明を築き上げていた。猿とヒトの立場が逆転した惑星でユリッスたちはどう立ち振る舞い、地球に帰還することはできるのか。——いつか起こるかもしれない遠い未来の話。

2年